〈論　説〉

エコノミクス
第8巻第3・4号
2004年3月

J. ラウントリーの社会経済思想

岡村東洋光

【1】 はじめに

英国社会の繁栄の基礎には，世界金融のヘゲモニーがあり，ロンドンを中心とするジェントルマン資本主義があった。台頭してきたミドル・クラスの主張は，それなりに影響力を持ったのだが，19世紀初頭の経済的・社会的背景のなかにあった，「古風で，腐敗した」世界を覆すには長い時間を必要とする。[1]

本稿で取り上げるラウントリー（Joseph Rowntree; 1836-1925）は，新興の革新的・開明的企業家であり，19世紀末葉に成功したチョコレート製造業者として台頭した。彼は，同時代の成功した企業家の多くが，この「古風で，腐敗した」世界の支配に迎合し，ジェントルマンを目指したのとは対照的に，これを批判し，上流階級に迎合しなかったという点で異色な存在であった。彼の軍国主義や貴族院批判，従業員への福利厚生，禁酒運動，労使の協調による新しい経営のあり方の追求や，地域社会の改革を目指すトラスト（公益信託）によるガーデン・ビレッジの創設は，必ずしも政治的，社会的に成功したものばかりではなかったが，アッパー・クラスに対抗するミドル・クラスの思想と運動として，歴史的にも現代的にも固有な意義をもっている。[2]

筆者はすでに，別稿[3]で彼のフィランソロピーと社会改良活動を紹介し，彼の思想の一般的特徴として，忠実なクエーカー主義とヒューマニタリアニズ

ムがあることを論じたので，ここではそうした彼の活動の後景にあると考えられる社会経済思想について紹介することにする。その場合，資料の制約もさることながら，企業家の書いたメモ類なので，学説史的な検討というのではなく，もっぱらラウントリーが当時の社会をどのように捉えたか，という観点から彼の論点を整理していくことにする。[4]

【2】 若き日の社会分析

ラウントリーが社会問題に関心を持った背景には，両親ともに熱心なクエーカー教徒であり，しばしば彼らの家に，奴隷解放運動などの活動を行っていたS. トゥーク やJ. ブライトが訪ねてきたという家庭環境があった。[5] そして，前年に結婚したばかりのJ. シーボームが1863年9月に突然病死した，という不幸な事件に遭遇したことを契機として，彼は貧困に関する資料を集め始めた。

貧困の実態把握

飢餓と貧困の根本原因を探究することに専念した彼は,「国富のあまりの多くが軍備に費やされ，そして滑稽なほど少額が教育に費やされていたこと」を発見した。また，彼は過去12年間の，イングランドにおける生活保護者数や婚姻登録から文字を書けない人の数を推定し，さらに1805年から1860年までの犯罪統計を作った。彼の考えでは，貧困・文盲・犯罪は相互に容易なむすびつきをもっていた。貿易・国内消費・人口を調査したのち，彼は税関と間接税務局の数字を使い，英国社会が次のような階級からなることを明らかにした。総人口を二千九百万人と推定し，その内訳を，百万人の上流階級と富者（約3.5%），九百万人の貿易商事務員，小売り業者など（約31%），千八百万人の技術者と職工（約62%），そして百万人の貧者（約3.5%）からなるとした。[6]

この数値をD. バクスターの1867年の推計と比較してみる。[7] ここでは人数ではなく，家族数があげられていて人数を算定すると，上流階級の人数は約0.5%，中流階級の人数は約20%，労働者階級の人数は約81%，そのうち賃金

なしの家族数は約10%となっている。バクスターの挙げる家族数・換算人数とラウントリーの挙げる人数比のずれはあり得る範囲内であり，ラウントリーの分析は，それなりの妥当性をもっていると考えられる。重要なことは，ラウントリーが百万人の貧者（約3.5%）の存在を確認したことである。

この数字に追加して彼は『ブリテッシュ文明。そこに含まれるものと含まれないもの』というエッセーを書いた。残念ながらこの原稿は残っていないが，その原稿を参照して伝記を書いた A. バーノンによると，J.S. フライが同業者への攻撃を引き起こしはしないかと心配するほどのものであった。ついでラウントリーは『イングランドとウエールズの赤貧』なるエッセーを書いた。こちらの方がもっと過激であった。いわく，保健省の医者は，最近，細心の調査の後に，わが国の人口の５分の１が十分な食物と衣服をもっていない。また，ラウントリーは自然の富に恵まれ，前例のない程の富をえたこの国で，百万の住民が生存をかけて闘いの日をすごしているということは奇怪な出来事である，と断じた。[8]

つまり，若き日のラウントリーは，C. ブースや B. シーボームの調査に先立って，「繁栄の時代」として知られる英国において，貧困の実態を推計してみせたのであった。こうした試みが，後に，息子シーボームにヨークの貧困調査を勧めて行わせた背景にあったのである。この貧困問題をどのようにして解決していくかということが，その後のラウントリーにとって，頭から離れない問題となった。

ちなみに，この時代の偏った所得分布は，「1900年までほとんど変化しなかった」[9] のである。C. ブースは，1886年から1902年の間のロンドンの社会調査に依拠して，ロンドンの約30%の住民が「貧困ないし欠乏状態」にあると結論し，同時期のヨークを調査した B. シーボームは，人口の3.6%が，生存可能な食事と健康を確保できないでいることを見いだした。この3.6%という数字は，上記のラウントリーの貧者の推計値とほぼ一致する。[10]

【３】 経済社会の理論的考察(1) —— 資本・機械・労働

次に，ラウントリーが，21歳の時からほぼ40年間にわたって教え続けた成

人学級での講義の際に利用した *Essay on Capital* と名付けられたノート[11]から，経済社会に関する彼のいくつかの論点を拾ってみよう。それは，全部で37頁からなり，日付は付いていないが，内容から推測すれば，晩年の作品と考えられる。この中でラウントリーは，「資本の定義」に関する問題と，「機械の導入が労働者に及ぼす影響」問題について取り扱っている。

資本の定義

ラウントリーは次のように言う。資本とは，「直接に消費される富（食料，衣服，家具など）ではなく，将来のさらなる富の生産のために維持される富」である。これを彼は，ラスキンが事例としてあげる鋤 plough に例えている。土地や労働がないと生産はできないが，鋤がなくても耕作はできる。だが，それだとわずかな収穫しかあげることはできない。鋤を使うことによって，もっと多くの収穫を得ることができる。こうした生産の増加に役立つ道具を，ラウントリーは資本と呼ぶ。これに加えて，原材料，売られる前の完成品，賃金も資本に数えられる。歴史的に見ると，人間は自分の肉体以外に，こうした生産に役立つ道具（資本）をますます多く利用し，生産拡大を行ってきたのである。資本と非資本の境界線は，利潤を得るために使われるか，そうでないかである。だから，消費者の手中にあって，家庭の消費目的に使われる商品やお金は資本ではない。[12]

だが，教科書的説明だと，資本は「生産活動をするために有益な食料，衣服」である，と表現されている。ラウントリーに言わせると，こうした表現は不正確である。なぜなら，①食料や衣服が労働者の手中にある状態は，直接的には彼らの労働者としての生活を支えるものであり，それを消費することが，かれらの労働を可能にするという理由をもって，資本であるとは言えない。また，②労働者が生活必需品を作る生産的労働を行うか，贅沢品を作る不生産的労働を行うかによって，資本であるかどうかを区別する，というのにも賛成できない，と言う。[13]

再度要約すると，労働者の手元にある食料や衣服は消費されるから，資本ではない。蓄積されるのは，現在の効用ではなく，将来の効用のために労働が投入される道具，建物，土地改良などのストックである。だから，あらゆ

る資本は，労働者によって作られるが，労働者が消費する食料や衣服は資本ではない(下線は筆者，以下同じ)。労働者の扶養に使用される財貨を資本と定義するジェボンズとは違って，ラウントリーはそれらが企業家の手中にある時は資本であるが，労働者の手中に渡れば，もはや資本ではないと言う。[14]

ジェヴォンズ教授を含めて古い経済学者(とラウントリーは表現している)が，こうした過ちに陥る理由を，ラウントリーは，彼らが事柄を「雇用者の観点から見ている」ことに由来する，と言う。すなわち，雇用者の観点からは，労働者の食料や衣服は，彼らが富を増やす労働を行うから「資本」に見えるが，こうした見方は，労働者を，雇用者の手中にある，馬や奴隷のような単なる道具と同じに見ているからに他ならない。それは，彼らの歴史感覚の欠如から来るのである。

もし，人間が自由であるという現実を踏まえるならば，もっとまともな結論が得られるはずだ，とラウントリーは言う。すなわち，ビジネスという舞台では，masters と men の partnership は，彼らの労働を共通の目的のために結びつける関係を意味するのである。これはずっと昔の industry で行われたものだが，この先の未来において，再び脚光をあびる運営方式なのだ。これは，また，大企業と小さな家族的な経営とを結びつける方式でもある。ちょうど，大企業における労働者は，こうした小さな家族的な経営と同じ立場に置かれる。両者においては，労働の内容は異なるかもしれないが，必要な労働という意味では同じである，と主張する。

以上のようなラウントリーの認識は，大企業における労使関係が（労使双方あるいは労働者相互に)，疎遠になってしまっている事実を踏まえて，Cocoa Works Magazine を発行して，労使の協力や労働者間の連携意識を高めようとした試みと共通している。経営者と労働者，および大企業と下請的な家族的小経営が，経営上のパートナーシップをしっかり固めることが，未来社会における産業のあり方であるという認識が，彼の企業経営の基本にあった。

資本の源泉

次に彼は，資本の源泉が貯蓄 saving から生まれると結論する。私的所有の

存在する社会においては，ある人が，自分と家族の消費に必要なものを超えてものを作ることができたとすると，その人は三つの選択肢を持つ。①それを退蔵する，②それを贅沢品の消費にまわす，③それを生産の拡大に使う，である。もし，その人がビジネスに従事していたら，③の選択が最もあり得る選択であろう。おそらくそれは，追加的な肥料・土地改良，工場の拡張・新機械の購入，店舗の改善・輸送手段の改良，などに使われるであろう。この事例で見られることは，労働が間接の目標 remote ends である，将来のより大きな生産力を可能とする手段の生産に，向けられるということである。こうして，その手段のストックが資本であり，それはその国の資本を増やす。[15]

ところで，生産や流通といったビジネスに関わらなくても，誰でもが，稼いだお金をすべて消費しなければ，余剰を作ることができる。彼らもまた，預金や株式によって利子や配当を得る。国債を買えば，政府にお金を貸すことになる。過去の無益な戦争のために発行された国債であれば，それを購入する個人にとっては収入をもたらすから資本であるが，国民にとっては資本ではない。また，海外投資の場合は，投資先の資本を増やすことになるが，国内の資本は増えない。[16]

以上のように，ラウントリーは，同じ貯蓄でも，国内資本を増やす事例と増やさない事例の区別を行い，暗に増やす事例を推奨しているように思われる。

固定資本と流動資本

次に，ラウントリーは，産業的関心から，固定資本 Fixed capital（耐久性のある設備に永久に固定されている）と流動資本 Circulating capital（主に労働者の食料と衣服）の区別について考察する。前者は，建物・機械・プラントであり，後者は賃金・原材料・完成財である。これらが利潤を生む限りは，資本と呼ばれてよい。資本であるかどうかの判断基準は，それらがさらなる富を生み出すか，または労働を節約するかに依る。

原材料や完成財のストックは，少なすぎると，頻繁に売買され，移動・輸送されるコストがかかるので，これを避けるために一定の大きさが確保され

ている。このことは，労働の節約と効用の増加を意味する。食料雑貨商の扱う砂糖を例にとると，購入や販売を大きな単位で行うことができれば，小口扱いよりも労働を節約できるから，資本を増やすことになる。また，賃金支払いのための貨幣が十分になければ，現物支給となって混乱を引き起こすことは間違いない。それを避けることを可能とする一定の貨幣量は，労働やトラブルの節約になるので，資本と呼んでよい，と言う。[17]

もし，道具や機械，建物などの製造や修理に当たる労働者がいなかったら，生産工程はやがて中断し，生産力が極度に低下することは容易に想像できる。逆に，それらの労働者が多すぎても，生産工程の効率的な運用は望めない。それはかつての英国で，1840年から続いた鉄道建設ブームが，資本を吸収しすぎたために，一般的な製造業の資本が不足し，やがて1849年の鉄道危機を引き起こしたことで証明されている，とラウントリーは言う。長期的に見れば，鉄道は英国経済に大いに貢献したけれど，バランスを欠くと害悪をもたらすのである。経験的には，こうしたケースは稀であり，むしろ固定資本の不足がしばしば見られる。

こうして流動資本や固定資本が，労働を節約し，富や効用を増やすとしても，「社会の安寧のために非常に重要なことは，流動資本と比べて大きくも小さくもない，固定資本の適切な量」を保つことである。[18]

以上のように，ラウントリーは，資本を二種類に区別した上で，企業家の観点＝産業の滞りなき進行というよりも，社会の安寧のために，両者の一定のバランスが必要であると述べている。ここにラウントリーの視点が，あくまで社会を見据えているものであると確認できる。「最近の roller mills の発明や鉄製造における新技術の導入が，旧技術の非効率さを証明したケース」では，「作られた固定資本が，新しい技術開発によって，すぐに非効率になり，その結果，旧技術に向けられた労働は偉大な損失となった」という評価においても，単に「雇用者の視点」ではなく，労働者を含む「社会」の視点の重要性が指摘されていると言えよう。

機械と労働

次に，ラウントリーは，これら両資本のバランスの問題を別の観点から考

察する。それがもう一つのテーマ，機械 machinery の導入は労働者に有害かどうかという問題である。これは，機械の使用によって生み出される超過生産物の公正な分け前を労働者が得るかどうか，という分配問題を含むがゆえに，十分な議論をすることは難しいという条件を付けた上で，ラウントリーは次のように言う。

機械の導入が失業を生むということは，よく知られている。なぜなら，機械の本質は，労働の節約にあるからである。すなわち，新しい機械が導入された場合，以前と同じ生産量を，より少ない労働量で作ることが可能となる。したがって新機械の導入によって，一定数の労働者が解雇されることになるのは明白である。しかし，実際によく見られることは，製造業者はより安い価格設定をできるから，今までよりも，より多くの量の販売が可能であると想定し，「より少ない労働者で同じ量を生産するのではなく，同じ数の労働者でより多い生産を行うことになる」[19] ケースである。この場合は，必ずしも失業者がでる訳ではない。こうして，まず彼は，経験的な考察から，機械導入を擁護する。

これに加えて，機械製造のための新規労働者，およびその維持・修理のための新規労働者の雇用が想定されるから，全体としては機械導入前と同じ数の労働者の雇用が想定される。しかも，それらの労働者は，一定程度より高い賃金で雇われることになろう。農業なら，大鎌による刈り取り作業用の労働者の代わりに，刈り取り機械が導入されると，何人かの労働者は失業するが，その機械を操作する労働者は追加される。むろん，実際にはこの移動は新しい訓練や教育を必要とするから易しいわけではない。

だが，ラウントリーは，「全体として，機械の導入効果は，分業に伴うマイナス面を考慮したとしても悪くはなく，むしろ良いと思われる」と結論する。なぜなら，①機械は，その本質においては，単純に人力の代わりに自然力を使う，ということである。社会にとっては，機械の導入が退屈な仕事をもたらすという傾向を補って，肉体労働の負担を少なくするという長所がある。②概して，機械に慣れた職工は，農業労働者やもっぱら筋肉を使う労働者よりも精神的に，時として肉体的にすら，優れている。彼らは確かに全体的により自律的な性格を持っている。そして，③注目に値する点だが，より高い

賃金を稼ぐ。機械の導入が一時的にもたらす困難がどうであれ，事実が明白に示していることは，総じて賃金を低下させるのではなく，高める傾向である。ただし，賃金があるべき程度にまで高められるかどうかは，労働者ではなく，雇用者が全体を所有している社会においては，機械の使用から生まれる超過生産物に対して，労働者が十分な取り分を得るかどうかにかかっているのである。

以上のように，ラウントリーは機械の導入を，作業の単純化＝退屈さというマイナスの要素を考慮にいれても，資本家にとっては労働の節約，労働者にとっても高賃金という要素を促進するものとして，肯定的に評価する。こうして資本と労働は，機械の導入に関して共通のプラス評価を持ち得ると結論している。

【4】 経済社会の理論的考察(2)――富裕と貧困

次に，C.H. ダグラス『経済民主主義』に関連する二つのノート[20]での議論を見てみよう。

ラウントリーは，ダグラスの議論を肯定的に評価しながら，問題の解決策を探っている。二つのテーマを挙げていて，一つは，現在の経済的難局はどんなもので，どうしたらそれを解決できるか。そして，もう一つは，国内のすべての産業従事者に対応する，基本的に必要で適切な食料をもたらす方法，実践的な方法とは何か，ということである。内容的には，一つに結びついている。つまり，貧困問題であり，その解決策である。

富裕と貧困

まず，世界で最も豊かなこの国は，J. ワット（1736-1819）が蒸気機関を発明した時代と比較すれば，何千倍も豊かになった。にもかかわらず，シーボームの調査で明らかにされたように，かなりの人口が肉体的に必要な食料すら手にしていない。つまり，彼らの衣食住にとって，基本的に必要な物の供給ができていない，という問題である。

これへの回答は，ダグラスが言うように，「機械が10秒で作り出す必要物を

手作りで10時間かけて作ることは，絶対的に長所（美徳）とは言えない。」効率のいい生産機械の維持は必要であり，「ビジネスにおいて全機械がスクラップにされなければならないと想定する必要はない」[21] のであって，機械化によるメリットを活かし，さらなる生産の継続・拡大を行わねばならないのである。上で見たように，ラウントリーは，機械は労使双方にとってメリットの方が大きいのだから，これをさらに活用して，生産拡大を目指さねばならない，という。

次は，その成果の効果的な分配問題である。実態は，一方では，労働者の生活条件は酷いものだが，他方では，富者のますます増加する贅沢がみられる。ラウントリーは，ホブソンを引用して，次の点を強調する。すなわち，「主要産物製造業は近代的機械的方法を採用しており，生産高の絶えざる増大を実現している。ところが，大衆の購買力が小さいことが，ほとんどの主要産物商品に対する国内市場の制約をもたらしている。そのため，製造業者は，あらゆる国でますます増大する輸出に目を向け，世界の遅れた国々における市場のために促し，競い合うことを強いられている。」[22] ホブソンの分析によると帝国主義の原因は，所得分配の不平等が過度の貯蓄をもたらし，それが過剰投資と過剰生産をひきおこし，その結果生み出された余剰資本が帝国主義政策へと，つまり，世界市場へ向けての輸出競争を招いており，この競争こそが，世界平和にとって最も大きな危険の一つではないのか，というものであった。したがって過少消費と帝国主義を助長している主体である金融業者と投資家をホブソンとともに，ラウントリーも批判した。

国家信用の転換

そこでダグラスの提起する解決策は，今日，生産目的のために資本家に行っている，国家の信用が消費目的のためにコミュニティに行くようにする，ということである。この主張を裏付けるために，ダグラスは，国家が銀行を支持し，銀行は製造業者に資金を貸し出すことが可能となるというメカニズムを主張した。これを，ラウントリーも肯定的に評価する。「いまや，国家は貸すのであり，借りるのではない」し，国家信用は莫大な価値を持つ国家資産であり，また，そういう意味では，国家によって銀行に付与された信用は，

国民にとって「最も明白な共同財産」ある。それにも関わらず，現実には，銀行は国家信用の管財人となり，資本家が銀行信用を利用している。この点では，他の点と同様に，「資本家が国家の機能を奪う」ことになっている。この国家信用→銀行→資本家→過剰生産→世界市場の争奪戦こそが，帝国主義の構造であり，これを国家信用→コミュニティとするということは，すでに実施されていた国家による年金や教育の制度的な保障のみならず，住宅や医療制度の確立を志向したものと考えられるし，それはまた，ラウントリーの反帝国主義政策でもあったのである。[23]

ラウントリーは，ダグラスとは違って体制転換や，鉱山，鉄道などの国営化といった制度転換でもなく，現存体制の枠組みの中で実行可能な解決策を模索するが，決定的な策を見いだせてはいない。人間にとって衣食住の基本的な必要物を確保する手段は，すべての産業にかかわる人に届けられるべきであり，この目的が達成されるまでは，どんな産業的休憩もありえない，という確認に終わっている。

ただし，ラウントリーが現存体制の枠組みの中で可能であると考える根拠としては，自分のココア工場の実態が悪くないという認識がある。いわく，今日のわれわれのビジネスは最良で，工場は明るく魅力的である。若者や少女への影響も良い。共同経営・管理の導入努力に関する教育訓練も最高である。*Cocoa Works Magazine* の最新号でも，生活と環境は素晴らしく，賃金も製品も良い。しかし，とラウントリーは言う。これは図柄の一方で，社会主義者は，「あなたの組織は，知的で成功裏に行使される工場システムである」とは言わないだろう。社会主義的志向に対し，有効な代替案は未だ見つかってはいなかったのである。確かに，大きな建物と高価な機械を保有する経営者には大きな富がもたらされ，システム全体からは，公平な分配よりも，富の集中傾向がもたらされた。大戦争（第一次世界大戦）は，工場システムが，この国の人びとに対し，かなり貧しいレベルでの食料供給しかもたらさなかったという事実を曖昧にしたし，加えて販売上の膨大な宣伝費が，膨大な国民的浪費となっている。自社の成功への自信と社会的な問題の解決の困難性，これがラウントリーの時代認識であった。[24]

【5】 新しい労使関係へ

時代は前後するが，上で提起された問題に基本的な考え方を示しているのが，ココア工場に関する論文[25]である。

ココア工場の労働問題

そこでラウントリーは，Canon & Mrs Barnett の主張する「実践可能な社会主義」を題材にして，彼らの言う理想の社会，すなわち「富者と貧者に別れた社会ではなく，雇用者と被雇用者が労働の利益を正当に分け合い，皆が固有な才能に喜びを見いだす社会」[26] を紹介した上で，自説を展開している。

ラウントリーは，目標がこうした高邁な理想とは違って，勤勉で，立派に振る舞う，ごく普通の男女の手の届く範囲にあるべきだと考える。ことに，年金基金といった，すでに実現された社会改良の成果を高く評価した上で，平凡な労働者を想定し，次のような像を描く。①結婚し，時には病気を患う平均的な家族を持つとしたら，60とか65歳になるまでに，自分や妻の老齢に備えるだけの蓄積が可能だろうか。②かりにそうした蓄えができるとしても，それは，単なる肉体的な欲求を満たす水準以上であろうか。自分の妻に対し，出産や子育て，家事労働の手助けが可能だろうか，また，生活上の息抜きや楽しみを維持するだけの収入は確保できるだろうか。③そもそも，自分自身の人間としての力がきちんと発揮できるだろうか，あるいは，まっとうな独立性が確保できるだろうか。ひとは，こうしたことを考えながら生きていく。[27]

ラウントリーは，自分の工場の労働者は，「彼の全生活が，勝手な命令に依存しており，雇用者やエージェントの無責任な気まぐれによってすら，依存している」他の多くの肉体労働者の場合とは違って，幸せなことに，個々人のまっとうな自立が，十分な生産が不可能である場合を除き，工場での訓練と完全に調和できている，と言うのである。自分の工場労働者の場合は，人間的な疎外感を克服できる諸々の仕組みがあるという自信の表れである。たしかに，別稿で述べたように，多様な福利厚生が実施されていた。[28]

労働者の貢献

ラウントリーは，労働者を，社会改良に貢献するものと位置づけている。同じく，前掲書から引用しつつ，以下のように論ずる。彼らによる生産の改良は，公正な報酬と妥当な労働時間を意味する筈である。逆に，彼らによるストライキやサボタージュは，労働者・産業・国家のいずれにも利益をもたらさない。このような悪行と闘う，別のよりよい方法がある。それは，労働者が彼らの産業の労働条件や労働過程の問題を，彼ら自身の問題として，大胆に主張することであり，そのようにできるまでに，自らを成熟させることである。そこに至るまで，彼らは決して民主主義の名前に値する産業的制度を実現できないであろう。

そういう労働者は，改良された生産や「科学的管理」によってであれ，あるいは，どんな特別な提案であれ，それらを彼らに上から課せられたものとしてではなく，彼ら自身の関心事として，彼ら自身の権利の問題として考える。そしてまた，彼らは，それを彼ら自身の個人的な便宜という観点からではなく，産業とコミュニティ全体における活動という観点，あるいは資本とのパートナーとして，責任をもって意見を提出する。

これを行うためには，労働自身の隊列内部での姿勢や組織の変更が前提とされる。つまり，労働組合世界内部での独占的異物やクラフト特権の除去，メンバーのあたらしい隊列の歓迎，彼らが自由に集うことができ，過去においてしばしば言われた，熟練労働者と不熟練労働者との間の，また，男女の間のギャップに橋を架けることなど，一言でいうと，労働組織の，もっと広範で民主主義的な形態の拡張が必要である。

実は，労使の相互協力の状況を作るには，労働者とならんで，資本の側も，多くの場所でなお大事にされている所有権に関する一定の家父長的観念を放棄すること，また，産業的サービスの共通の土俵の上で，労働者の代表と喜んで会うことが前提とされる。資本と労働は，譲与の利潤の配分に関する集合的取引のみならず，彼らの共通の関心事である産業とサービスの問題，労働組合にとってそれがもっと良くなるように，英国産業のための，そして国家の安全と繁栄のための議論を現実的に行うよう，互いに協力すべきである。このように，労使のパートナーシップが志向されている。[29]

資本家の貢献

前掲書からの引用は続く。「しかし労働者が知るべきことは，来ている嵐は，資本家にとってはもっと大きな嵐であるということだ。戦時中は，富の浪費が唯一の道であったように，労働にとってのモラルが極大生産なら，資本にとってのモラルは極大税である。」それは，国家の新しい負債に合致する唯一の道である。富者は，国家に対して今までにない規模での貢献を求められている。

国富分配の大きな不平等は，長い間存在する悪として感じられてきた。しかし，多くの者は，単に利己的な怠惰からのみならず，また，提案された救済策と階級的反感の精神への不信任から，それを黙殺してきた。彼らは，国内の彼らの仲間である大衆から彼らを区別するように見える「大所有」について不安を感じてきたが，それにもまして彼らは，彼らを略奪する企図を持つ提案に，もっと不安を感じている。

今後は，戦争前よりももっと無意味で厳しい階級闘争にたちかえるのを避けようとするならば，トップにおける最大規模の贅沢とボトムにおける欠乏の双方の行き過ぎが，国家によって避けられねばならない。戦争が多くのことをすでにもたらしたように，新しい習慣は新しい規準もたらすであろう。そして「その全階級の市民の，より強固な結びつきによって強くなったイングランドは，啓蒙化された世界がどこでも出くわすであろう産業的問題の解決の道へと進むことが可能であろう。」

ラウントリーは言う。よく言われることは，第一次世界大戦後，われわれは，みな，新しい世界で生きていて，新しい問題に直面している，ということである。そして，上で引用した文章から，新しいイングランドは，「われわれが親しくなりたいと望んでいるいくつかの大きな考え方を与えてくれる」のであって，「もし，ヨークのココア工場において，われわれが次の数年，それらに実践上の形を与えることができるならば，われわれは，資本と労働との間の要求の和解へ向けての価値ある貢献をすることができるであろう。」と結論している。[30]

企業家のイニシアティブ

以上の，労働と資本の役割に関する主張は，明らかに労使の新しい協働体制であり，ある種のパートナーシップである。その場合，ラウントリーは，あくまで経営者のイニシアティブを想定する。それを「上記の思考に結果が加えられる時，考慮すべき諸論点」として次のように集約している。すなわち，「どんな変化が導かれようが，わたしは，労働によってそれらが，われわれに課せられるのではなく，われわれがイニシアティブをとって何がなされるべきかの実践的方向を与えることができるのを望んでいる。」

そして，具体的な議論を始める前提として，その数の多さもあって，男性労働者のみならず，女性労働者の報酬問題も考慮しなければならないとした上で，まっとうな暮らしが可能な平均的な賃金をどのように設定したらよいかと自問している。

賃金についての意見は以下のようである。(1)しっかりした例外的な利潤をつくる企業においては，これらの利潤が続く限りは，国の大多数の企業よりも，労働の報酬はさらに大きくなるであろう。(2)その場合，①例外的利潤を創る企業は，労働の報酬で指導的役割を果たすであろう。あるいは，②そうした企業が設定する事例の価値は，もし，その労働の報酬が，十分な業績を上げている大多数の企業が許す大きさを相当超えるならば，おそらく守られないであろう。(3)どちらになるかは，労働の効率性の顕著な変化はなくても，労働の報酬が大きく増えることを，国の資本が許すことができるかどうかで決まるであろう。

で，ここでラウントリーは，英国の富の量と貧困問題解決に必要とされる財源についての根本的な疑問を提起している。すなわち，そもそもイングランドで創られた富の量が，国民全部がうまく暮らして行くに十分であるのか，という問題である。このように考えるようになったのは，「数週間前に，C. マネーによって書かれた論文」や「サー・H. ベルが，最近のシーボームとの話の中で，ノーザン・イースタン鉄道の賃金に10%上乗せしたら，配当のための全利潤がなくなると言った」ことに触発されてのことであった。しかし，ラウントリーは，その後で次のようにも言う。

ここ数年の間の，この国での実践的な社会主義の勢力拡張を忘れていない

――老齢年金，無償教育，国民保険法，――しかし，これらの便益が許されても，毎週の賃金への実質的な追加は，残っている。もし，可能ならば，われわれがキャノン・バーネットの理想にかなり近づくことができるなら，わたしは，この追加がそうであるという結論に到達したいと願う。労働の報酬という，この問題を取り扱うなかで，C. マネーの仮定が，おおよそのところ正しいのかどうか，国内で創られた富の総計が，英国民全体が健全な暮らしをするには不十分であるかどうか，を知りたいと思う。[31]

所得の不平等

他方，貧困問題とは別に(とラウントリーは考える)，所得の不平等は，厳然として存在している。少数者への富の集中が示している事例として，1913年4月22日の財務委員会でロイド・ジョージによってなされた報告を示す。「財産への相続税は，276,000,000ポンドを数えた。昨年はおよそ425,000人の大人が亡くなった。上記の財産について，三分の一が292人に属し，半分が1,300人に，三分の二が4,000人に属している。他方で，350,000人の大人は財産を持たず亡くなり，国務省当局に合法的に死を届けるために数シリングを支払った。」あるいは，ウエッブ夫妻は「サンジカリズムとは何か」という論文で，所得の不平等について書いている。「人口の十分の一が蓄積された富の十分の九を所有している。大人の五分の一が年収の三分の二を獲得し，手労働の賃金労働者である五分の四に，三分の一の富がシェアされている。この不平等の結果，世界がかつて知ったより以上の，かつてないほどの富が生産されているにもかかわらず，これら手労働の労働賃金稼ぎ全体の三分の一が，ほとんど何も持たない状況である。他方で，他の三分の二のほとんどがこのわずかの水準を稼ぐのみで，産業のわずかの停滞や混乱が彼らの多くから所得を減じ，貧困へと導いていく。」

このように，ウエッブは，所得の不平等な分配と貧困問題とを結びつけて考えるのだが，ラウントリーには，貧富の格差と貧困問題とを別問題として扱おうという姿勢が見られる。彼は，国民的富の量が本当に問題解決に足りる量なのかどうかを知りたいと願い，J.A. ホブスンに助けを求める。ホブソンによって書かれた *The Nation* 掲載論文を挙げながら，ホブソンが，たとえ

ば，年々の国民所得，貯蓄，蓄積された資本量，追加資本量，労働報酬の総額，などに関する数字をもっているとして，ホブソンから，この問題のほぼ明確な回答を得られることを期待している。[32]

所得分配—利潤シェア計画

残念ながらその回答については不明のままだが，ラウントリーは，所得分配に関して，ココア工場で何が可能なのかを追究している。たとえば，利潤シェア計画に関しては，一つの選択肢である，出来高賃金システムについて，次のように言う。出来高賃金システムの弱点は，個々人や小さな集団に適用された場合ですら，次のような弱点を持つ。すなわち，一方で，それは個人的な取得の欲求を刺激するかもしれないが，他方で，われわれが望む協働的な精神の創造へ向けては何の働きももたない。ある部屋や集団の労働者は，彼ら自身以上には，他の部門の活動には何の関心も示さないし，さらには，もし，システムの範囲には入れられない多数の労働者がいたら，彼らは関心を欠くことになるだろう。あるいは，これらのいくつかの部所では，ごまかしが横行することにならないだろうか。[33]

協働精神の創造へ

要するに，重要なことは，工場の中に協働精神をつくりだすことである。そして，どのようにしてこの精神が維持されるのか，ということこそが問題であり，もし，われわれがこの協働精神を呼び起こすのに失敗したら，われわれが求める結果を得ることはできない，とラウントリーは言う。

シーボームは科学的管理の方向に考えをめぐらしていて，ラウントリーもそれに期待している。だが，科学的管理の形態は，これまでの報告を聞く限りは，協働精神の創造の方向ではなく，個人的な利害関心をもつ労働者を大いに助けることになるであろう。つまり，科学的管理は，特別な能力を持つ労働者や有能な管理者に特別の評価・報酬をもたらすであろうが，これは労働組合の主張する「合理的生活賃金」とは違う。目指す回答は，勤勉で十分に働く平均的な能力を持つ労働者の報酬問題である。例外的に大きな利潤を挙げるわれわれのような企業では，労働者が合理的な認識を持ち，経営者が

経営に関する深慮と，労働者との和解をできるだけ素早く実現できれば，おそらく5年から10年の間に，平均的な労働者が基本的な生活を維持するに十分な目標が達成されるかもしれない。[34]

これらの質問は個人的に取り組むには大きすぎるのだが，ラウントリーにとっては，政府や官僚の外側にいる人間としての，個人的見解である。そのような立場の人間の方が，自由で柔軟な発想で，解決策を見出せるかもしれないのである。

最後に，1919年に，彼がトラストの評議委員会のメンバー宛に書いた提案を紹介し，結びとしよう。まず，将来を見据える思想と方針が必要である。それは近い将来この国の労働者が行うかもしれないあさはかな要求によってわれわれの忍耐が試されると思われるからである。わたしが精神的な同意をえようとしている提案は，以下の通りである。

1）英国の現在の産業組織は，とりわけ以下のような理由により不健全である。(a)それが産業戦争，えん曲的にいうと競争に基づいていること。(b)それが国を階級に分断してきたこと ―― 一方の側に資本の保有者，他方の側に労働者。彼らは異なる利害をもち，互いに大きく敵対している。(c)多数の人々が，最低限に必要な精神的，物理的能力を確保できないでいる，というシステムが機能してきた。2）現存システムの害悪を最小限にしようとしているわれわれのような企業は，当然，過渡的地位を占めており，そしてその社会進歩を助ける能力は，この過渡的地位を率直に認めることに大きく依存している。3）目標がとる正確な形がどうであれ，個々人が可能な最善の生活を自らのために得るため，また，同様に他人のために，あらゆる面において完全な暮らしを確保するべく，誰もが努力すべきである，と。[35]

ここに表明されたラウントリーの思想は，労使の協働，すなわち労使のパートナーシップの必要性であり，それは企業家から見た産業の民主化であった。その主導権を企業家が握るというのは，彼の社会に対する責任感の表れでもあった。

《注》

1）川北稔「福音主義者の理想と奴隷制の廃止」松村昌家他編『英国文化の世紀1　新

帝国の開花』第4章を参照。

2）ジョナサン・バリー，クリストファ・ブルックス編『イギリスのミドリング・ソート』昭和堂，1998参照。

3）拙稿「J. ラウントリーの社会改良思想」岡村東洋光・久間清俊・姫野順一編著『社会経済思想の進化とコミュニティ』（ミネルヴァ書房，2003）第4章。

4）ここで利用したものはもっぱら Joseph Rowntree Foundation 図書館所蔵の資料である。JRF は現在，21世紀の事業として，ヨーク市と協力して New Osbaldwick に540戸の新しい村創りに取り組んでいる。参照，ホーム頁；www.jrf.org.uk/

5）アーサー・ブリッグズ『ヴィクトリア朝の人びと』ミネルヴァ書房，1997（初版1988），第8章ジョン・ブライトを参照。

6）Anne Vernon, *A Quaker Business Man The Life of Joseph Rowntree 1836-1925,* 1987（first. 1958; pp.61-3

7）U.T.J. アークル『イギリスの社会と文化　200年の歩み』英宝社，2002．172頁の表，およびパット・セイン『イギリス福祉国家の社会史』表1－1，7頁参照。

8）Anne Vernon,op.cit.,

9）パット・セイン，前掲書6頁

10）Benjamin Seebohm Rowntree, *Poverty: A study of town life.* 2000.（first, 1901）

11）JR 図書館所蔵，資料番号は JR93/Ⅵ/2

12）Ibid., pp.1-6.

13）Ibid., pp.8-9.

14）Ibid., pp.18-9.

15）Ibid., pp.15-7.

16）Ibid., pp.17-8.

17）Ibid., pp.22-6.

18）Ibid., p.26.

19）Ibid., p.33.

20）①「C.H. Douglas『経済民主主義』（Economic Democracy）に関するノート」May, 1920（JR93/VI/13）で見出しには「経済的，社会的難局――高賃金，だが高物価」とある。もう一つは，②「『高賃金，だが高物価』に関するノート」21, June 1920（JR93/VI/13）である。なお，ダグラスの本は，*Economic Democracy,* 1920（London）であると推定される。

21）Ibid., ① p.4.

22）Ibid., ① pp.5-6.

23）Ibid., ① p.5., ② p.5.

24）Ibid., ② pp.5-6.

25）*The labour question at the Cocoa Works,* Jan/1916（JRF 図書館所蔵，資料 JR93/

VI/11)

26) Ibid., p.1.

27) Ibid.

28) 拙稿「J. Rowntreeの社会改良思想」参照，所収；九産大『エコノミクス』6-4，2002.

29) *The labour question*. pp.2-4.

30) Ibid., pp.4-5.

31) Ibid., pp.5-6.

32) Ibid., pp.6-8.

33) Ibid., pp.8-9.

34) Ibid., pp.9-10.

35) 1919年4月24日付けの「ジョーゼフのメモ」所収；Luther Worstenholm, *Joseph Rowntree (1836-1925) A Typescript Memoir*. (hrsg. by S. Barkeman, 1986)

なお，*Rowntree and the Marketing Revolution 1862-1969*. (1995) においてRobert Fitzgeraldは，企業としてのラウントリーの弱点を，ジョーゼフが「良質の製品」を誠実に作るという姿勢を貫く一方で，宣伝やマーケティングに対して無理解であったことに求めている。だが「良質の製品」を「誠実に」作るというのは，クエーカーの倫理に沿ったものであり，ジョーゼフがクエーカー信仰に忠実であれば，当然のことであった。また，宣伝費は国民にとっても総大な浪費であるというジョーゼフの認識は，軍国主義や帝国主義と結びついた倫理なき経済を批判の対象としていたことからすれば，必ずしも非難される弱点とは言えないであろう。